九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

田中正平の「純正調」オルガンに適用された音律 : 53平均律と1/8-スキスマ・テンペラメント

篠原, 盛慶

https://hdl.handle.net/2324/1931920

出版情報：九州大学, 2017, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

（様式６－２）

氏　　名	しのはら　もりよし 篠原　盛慶
論　文　名	田中正平の「純正調」オルガンに適用された音律 ―53 平均律と 1/8-スキスマ・テンペラメント―
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　藤枝　守 副　査　　九州大学　　教授　　矢向　正人 副　査　　京都市立芸術大学　　教授　　柿沼　敏江

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、物理学者の田中正平(1862-1945)が長年にわたって製作した一連の「純正調オルガン」に関する詳細な音律研究に基づき、また、日本に残された田中のオルガンの楽器機構に対する調査が合わせて報告され、きわめて貴重な内容となっている。

これまで、田中の「純正調オルガン」は、その名称が示すように「純正律」という調律方法が適用されてきたと考えられてきた。しかしながら、田中の文献や言説の詳細な調査から、このような通念が誤りであり、実際には、53 平均律や 1/8-スキスマ・テンペラメントが適用されていたことを解明された。本論文におけるこのあらたな事実は、これまでの田中の音律思考や理論の解釈を一変させ、田中の理論や実践の再評価につながるものである。

また、本論文では、田中が提唱した日本の和声理論における音律に関してもふれており、近代西欧の和声や音律理論を体現した田中自身が自国の和声理論に対して画期的な思考を持ち合わせてことも明らかにされている。このように田中自身が行った研究や実践に基づいた本論文は、今後の日本の音律や和声に関する歴史的な理論の展開を問い直す大きなきっかけになるであろう。さらに、本論文で詳細に記述されたオルガンの設計における田中の試みは、楽器学にも影響を与えるであろう。

公聴会の終了後、論文調査委員会は学位論文の審査を実施した。その結果、篠原盛慶氏の本論文は、博士（芸術工学）の学位を授与するに相応しいという判断に至った。